

秋山和夫の幼児教育論 (2)

小野 順子

福山平成大学 福祉健康学部
(こども学科)

E-mail : onojun@heisei-u.ac.jp

【要旨】

本稿は秋山研究の第2報である。第1報では「幼小連携」「小学校との接続」に焦点を当てて論じた。しかし、今回は、研究の視点を一つに絞らず秋山の業績全体を鳥瞰することによって、秋山の研究の概要を把握することにした。このことにより、保育施設の形態が多様化している現在の保育現場の問題を解決する具体策を明らかにすることができると思えたからである。

研究の方法としては、秋山が生存中に書き記した著作物を見つけ、まず、時系列に沿って書き記すことにした。経歴にも書いたように、秋山は研究者として論文を発表する傍ら、幼稚園園長として園の研究にも助言し研究報告に論文を載せている。また、県史市史等の編集や保育・教育系の雑誌への投稿、保育者・教育者養成のための教科書の監修・編集・執筆、シンポジウムの司会原稿等、保育・教育の向上に貢献するために様々な活動を行った人物である。著作物は数多く、全体像は未だ掴めていないが、現時点で判明している著作物を時系列で分類することにする。この作業によって、秋山の興味・関心の変遷と保育・教育をとり巻く時代の要請との関係が明確化されたと考えた。次に、それらの著作物を年代、ジャンル、内容に分類し、さらに、ジャンルの年代別、内容の年代別、内容のジャンル別に分類して考察を行った。

その結果、秋山が生きた時代である昭和から平成にかけての戦後の日本の幼児教育の展開過程が明らかになった。今後は秋山研究を史的資料に基づきながら実証的に研究することで、幼児教育・保育の戦後の歩みを制度、行財政、理論、カリキュラム・方法、保育者養成、保育実践、親の幼児教育意識といった側面から実証的に明らかにできると考える。

キーワード：幼児教育史、秋山和夫、保育理論

1. はじめに

「戦後最大の改革」¹と言われる子ども・子育て支援新制度によって、「子ども・子育てに関わる行財政制度が変わり、幼稚園・保育所の二元制度から、幼保連携型認定こども園や小規模保育などを含む多様な施設のあり方へ向かって」²いる。

従って、現在は、多様な保育施設で営まれる保育の質が問われてきている時代である。このような時代においては、保育観や幼児教育観を今一度学びなおし、これからの保育者養成や現場保育者研修に役立てていく必要があると考える。そのために、先達に助けを求めることにした。すなわち、幼児教育者を一人取り上げ、理論や研究のアプローチを振り返ることで、多様な保育施設で営まれる保育の質の向上につながるのではないかと考えた。

現在、筆者が注目しているのは秋山和夫である。秋山は、岡山県の教育を牽引してきた教育者である。「岡山の教育」他、多数の岡山の教育に関する著作があり、また中央教育審議会等の委員も務めている、さらに、坂元彦太郎から幼児教育について学んでいる。これらのことから、秋山和夫を取り上げ、その保育思想、研究のアプローチ、実践との関係性について研究することとした。

秋山の幼児教育論は多岐にわたっている。ルソー、エレン・ケイ、デュイ、倉橋惣三、坂元彦太郎の考えを元として展開される幼児教育論や子育ての智慧について行事や慣習から述べたもの、教育観の変遷を歴史的な観点から述べたもの等である。特に、行事や慣習と子育てについては、柳田邦男らの研究を元に子どもの発達への関わりについて詳細に述べた著書が数多くある。また、岡山大学附属幼稚園の実践研究にも深く関わっていたので、これらの研究資料からも秋山の幼児教育観を見ることができると考える。

本稿は秋山研究の第2報である。第1報では「幼小連携」「小学校との接続」に焦点を当てて論じた。³しかし、今回の研究では、研究の視点を一つに絞らず秋山の業績全体を鳥瞰することによって、秋山の研究の概要を把握することにする。このことにより、保育施設の形態が多様化している現在の保育現場の問題を解決する具体策を明らかにすることができると考えるからである。

2. 研究対象としての秋山和夫

1) 経歴

第1報でも著しているが、本稿でも簡単に秋山の経歴

を記すことにする。

秋山和夫は、1952年（S27）広島文理科大学教育学科を卒業後、岡山大学教育学部附属小学校教諭、同大学教育学部講師、助教授を経て、1975年（S50）教授に昇格し、1977（S52）から同大学教育学部附属幼稚園長を兼任した。その後、同大教育学部長、文部省教育課程審議会委員を歴任し、1995年（H7）同大退官と同時に山陽学園大学副学長その後学長を務めている。しかし、任期途中の2000年（H12年）に没している。

岡山大学教育学部附属小学校への勤務は、当時の学科長であった坂元彦太郎の考えであったと追悼文に記している⁴ように、坂元彦太郎から幼児期から児童期にかけての教育について学んでいる。そして、小学校教諭の経験を基に、幼児教育について研究すると共に、附属幼稚園長として理論を実践と結びつけている。特に、小学校との接続については小学校教諭の経験から、幼稚園・保育所関係だけでなく小学校関係での発言も多く、研究会や学会で小学校との接続をテーマにした対談や鼎談を企画・司会もしている。

2) 社会状況の確認

秋山が唱えた幼児教育論の背景を探るために、その時代の社会状況を確認することにする。経歴を鑑みると、1950年頃から2000年までの50年間を対象とすることが適当であると考えられる。また、秋山は幼稚園を中心とする保育に関わった人物であるので、幼児教育や幼稚園に關係する社会の動きを中心に確認することとする。

① 1950年代～1970年代

この時代は、高度経済成長期と言われている。

高度経済成長は、大量の労働力を必要とした。そのため、女性労働力の積極的な活用がはかられ、女性の社会進出が進んだ。さらに、核家族化の進行により、子どもや子育てをとり巻く環境も変化し、保育・子育てに対する社会的要求が高まっていった。

幼稚園では、1948年の保育要領に代わる幼稚園の教育課程を明確に示す基準の作成が求められ、幼稚園教育要領の刊行、幼稚園設置基準の公布があり、そして、幼稚園教育要領は1964年には改訂された。保育所では、1961年に児童局長通知において入所基準が定められ、1965年に保育所保育指針が刊行している。高度経済成長は幼稚園・保育所の増加をもたらしたので、その法的整備が整った時代とも言える。

② 1970年代～1980年代

1971年に文部省が「幼稚園教育振興計画要項」を発表した結果、幼稚園が急増した時期である。保育所も高度経済成長を受けてますます増加してきた。この時期、科学的認識を高めようとする実践が多くなり、「幼児の科学的な気づきや思考の過程をとらえた指導」⁵に注目が集まったが、「ワークブックを用いて取り入れる園も出てきた」⁶この状況が加速化した結果、1970年代後半には「早期教育ブームやつめこみ式教育の弊害で子どもの自殺やノイローゼが多発し、それを反省する風潮が出てきた」⁷この反省が1989年の幼稚園教育要領改訂へと繋がるのである。

③ 1990年代～2000年

1989年の幼稚園教育要領は、6領域が5領域になったというだけではなく、「環境を通して行う」ことが前面に出された画期的な改革であった。子どもの主体性を尊重し、子どもの生活を重視することは戦前から幼児教育の基本であったが、法的拘束力を持つ幼稚園教育要領に明記されたことで、現場保育者が混乱したことは事実である。

また、経済ではバブル崩壊が起こったことで共稼ぎ家庭が増加し、保育所不足・待機児童問題が深刻化した。幼保二元化、保育所の設置基準等、保育所の在り方が問われた時期である。

3. 研究の方法

1) 時系列での表記

秋山が生存中に書き記した著作物を見つけ、それを時系列に沿って書き記すことにした。経歴にも書いたように、秋山は研究者として論文を発表する傍ら、幼稚園園長として園の研究にも助言し研究報告に論文を載せている。また、県史市史等の編集や保育・教育系の雑誌への投稿、保育者・教育者養成のための教科書の監修・編集・執筆、シンポジウムの司会原稿等、保育・教育の向上に貢献するために様々な活動を行った人物である。著作物は数多く、全体像は未だ掴めていないが、現時点で判明している著作物を時系列で分類することにする。この作業によって、秋山の興味・関心の変遷と保育・教育をとり巻く時代の要請との関係が明確化されると考える。

2) ジャンルによる分類

教科書として書かれたものと論文として書かれたもの、論説として書かれたもの、そして随筆の形態で自分の意見を述べたものの4項目に分類する。各項目の具体

的内容を以下のように規定する。

まず、教科書である。辞書によると、教科書とは学校の各教科の授業で使う書物であり、また小中高の学校だけでなく「大学教育や社会教育など、特定の目的をもって学ぶ者の集団で、その目的達成に必要な知識・技術を習得させるために、その基本的内容を体系だてて編んだ書物」⁸であるとされている。つまり、その内容は、著述された時点で周知のことである。著者の考えも含まれていることもあるが、その考えも公に検証されたことが書かれている。このようなものを教科書として書かれたものとする。

次に、論文である。学会で発表されたものはもちろんであるが、本稿では論文を「特定の学問上の問題について、十分な論拠をもとにして、主張や証明を行なう、論理的に構成された著作」⁹という意味で使用することにする。その理由として、秋山は附属幼稚園園長就任の頃より子どもの実際の生活の中から彼独自の保育観・子ども観を持つようになり、独自の考えを発表するようになっている。その中には、仮説と事実から論理的・理論的に導かれた帰結や結果があるものばかりではなく、主観的な主張を論理的に述べたものもある。本来の論文の意味からは逸れるが、独自の説を論理的に展開している点で、これを論文ととらえることにする。

論説については、次のように定義する。「事物の内容や理非を論じ、自説を述べたり、説明したりすること。また、その文章」¹⁰すなわち、論文のように論理的に自説を述べているが、論文のような論拠が不十分であるという捉えである。秋山は、雑誌への投稿が多いので、この論説が多いと考える。

最後に、随筆の形態で書かれたものである。随筆とは、「形式の制約もなく内容も自然・人事・歴史・社会に関する見聞・批評・思索あるいは研究考証など、多岐にわたって筆の赴くままに書き記した散文の著作」¹¹であるが、「筆者の個性や資質、才能の端的な表現」¹²が現れている。したがって、先ほどの論文の範疇に入らないものである。そのため、論理的な書き方でない代わりに、筆者独自の考えを知ることができると言えるであろう。

秋山の著作物を以上の4つに分類する作業を通して、秋山の幼児教育観が整理できると考える。教科書として書かれたことは、その時代の幼児教育論でも特に秋山が重要であると考えている事柄であろう。また、論文や随筆では、その時の幼児教育に関する秋山独自の考えを述べているので、この場合はダイレクトに秋山の教育論を

知ることができる。と考える。

3) 内容による分類

秋山の研究は、「学習と思考」のように心理学の分野からの見解を述べたものから、「岡山県保育史」のよう

表① 時系列の分類

	発行年	ジャンル	内容区分	「書名」(分担執筆の場合は担当章の題名) または論文題名	出版社名・雑誌名
1	1954	論文	1	学習と思考	日本教育学会大会研究発表要項 13(0)
2	1959	論文	1	人間的教養と普通教育の伝統	岡山大学教育学部研究集録 (7), ????, 1959-03
3	1960	論文	1	明治初期における岡山県の初等教育--児童就学と教師の問題を中心として	岡山大学教育学部研究集録 (9), 25-34, 1960-01
4	1964	論文	1	「岡山県保育史」	フレーベル館
5	1967	論文	1	人物を中心とした岡山県郷土史-主として明治期における小学校と幼稚園	文部時報 (1082), 83-92, 1967-09
6	1968	論文	1	「日本新教育百年史7巻」	玉川大学出版
7	1968	論文	1	「岡山市史 宗教教育編」	岡山市
8	1968	論文	7	わが国における幼児教育方法論の展開-1-幼稚園概念と思物主義との結合を中心にして	岡山大学教育学部研究集録 (25), 27-35, 1968-03
9	1971	論文	1	「保育に生きた人々」	世界教育日本協会
10	1971	論文	7	3才児保育に関する基礎研究(その1)	日本保育学会大会発表論文抄録 24
11	1972	論文	1	「人物を中心とした教育郷土史」	ぎょうせい
12	1972	論説	1	幼児期の教育の原点を考える	新教育時代
13	1973	論文	2	幼稚園における学級の適正規模についての考察	岡山大学教育学部研究集録 (35), 23-32, 1973-02
14	1974	論説	1	現代社会における幼稚園の役割	新教育時代
15	1974	論説	14	「子どもとおとなの出会いから4 子育ての知恵」	三省堂
16	1975	論文	1	保育観の検討(続報)	日本保育学会大会研究論文集 28
17	1975	論文	1	保育観の検討--高等学校家庭科教科書保育分野の分析を手がかりとして	岡山大学教育学部研究集録 (42), p9-24, 1975-03
18	1977	論文	1	岡政	幼児の教育 201
19	1977	論説	7	はじめに	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 10
20	1977	論説	7	自由遊びとその指導	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 10
21	1978	教科書	1	不明	保育講座4 教育原理
22	1978	論説	4	はじめに	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 11
23	1978	随筆	18	「随筆・一日一題」秋山和夫	山陽出版社
24	1979	論文	1	「講座現代教育学 日本の教育思想」第7章益軒	福村出版
25	1979	論文	1	「岡山文庫」岡山の教育」	日本文教出版
26	1979	論文	3	幼稚園と小学校における学力等相関の研究	岡山大学教育学部研究集録 (51), p141-154, 1979-07
27	1979	論説	4	まえがき	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 12
28	1979	論説	4	幼稚園教育における評価	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 12
29	1979	教科書	5	「幼児教育論」第1章幼児期における教育の意義	ミネルヴァ書房
30	1979	教科書	13	「保育講座5 教育実習」第1章教育実習の意義 第4章教育実習の実際3 研究保育 第5章幼稚園教育の理解1 幼稚園の指導形態の特色7 障害を持つ幼児の指導	医歯薬出版
31	1980	論説	12	「子どもの目が輝くとき」	チャイルド本社
32	1983	論説	7	幼児の適応・不適応	家庭と教育 5月号
33	1983	論説	12	幼児教育の本質が問われるとき	幼児の教育 101
34	1983	教科書	13	「子どもの遊びシリーズ 生活習慣」	中央法規

に一定の地域の保育の歴史について調べたもの、または「子育て 共働きの子育て」のように家庭保育(子育て)について論じたものまであり、非常に幅広く幼児教育全般にわたっている。そこで、本稿では、どのような内容

35	1983	教科書	13	「子どもの遊びシリーズ 砂遊び」	中央法規
36	1983	論説	16	幼小関連の現実から	保育専科 4
37	1984	論文	1	「明治維新教育史」	吉川弘文館
38	1984	論説	1	子どもの心を楽にする保育を	幼児の教育 501
39	1984	教科書	7	「指導法の研究 保育方法と形態」第1章保育形態とは何か	医歯薬出版
40	1984	論説	7	幼児期の情操教育	教育新世界 12
41	1984	論文	13	教育実践に関する新しい試み--中学生の野外集団活動への大学生の参加(事例紹介)(教員養成特集)	大学と学生 (215), p38-41, 1984-03
42	1984	随筆	14	「現代子ども研究3たのしい子育ての本-幼児教育ファンデーション-」	東方出版
43	1984	論文	14	共働きの子育て	岡山大学教育学部研究集録 (67), p19-35, 1984-10
44	1985	論文	6	幼児の生活習慣についての親の意識に関する一考察--幼児の生活行動に要する時間との関連において	岡山大学教育学部研究集録 (68), p1-13, 1985-01
45	1985	論説	6	社会性を育てる幼稚園教育官見	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 17
46	1985	論説	16	低学年教育の改造	教職研修 5
47	1985	論文	16	幼稚園と小学校との関連についての考察-「婦人と子ども」 「幼児の教育」の論説を中心にして-	幼児教育研究
48	1986	論説	11	「保育の絵本研究」まえがき	三晃書房
49	1986	論説	16	学習指導における幼・小の連携	文部省初等・中等教育局小学校課・幼稚園課編 初等教育資料
50	1987	論説	5	今、保育者に何が求められているのか	現代保育 5
51	1988	論文	1	「岡山県の教育史」教育文化宗教	思文閣出版
52	1988	論説	2	これからの幼児教育に期待するもの	文部時報 2
53	1988	論文	6	幼児の運動と疲労に関する一考察	日本保育学会大会研究論文集 41
54	1989	論文	1	江戸時代ひとつくり風土記	農村漁村文化協会
55	1989	論説	4	教育課程の改訂と保育者の使命	現代保育 5
56	1989	論説	7	体験を通じた活動を	幼児の教育 601
57	1989	論文	16	生活の教育化と幼稚園教育	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 19
58	1989	論説	16	小学校低学年と幼稚園との一貫性	教職研修 4
59	1990	論説	1	現代社会における幼児教育の課題	学遊 3
60	1990	論文	6	保育方法の違いによる足型への影響	日本保育学会大会研究論文集 43
61	1990	論説	7	生活する力を育てる幼稚園教育を	幼稚園時報 3
62	1991	論文	1	「岡山県教育史 昭和31年～昭和50年」	岡山県教育広報協会
63	1991	論文	1	「岡山市百年史上、下」	岡山市
64	1991	教科書	12	「園とクラスの経営-新・新・幼稚園教育要領準拠」	同文書院
65	1991	論文	12	「保育の指導法」を求めて	日本保育学会大会研究論文集 43
66	1991	論説	12	「主体性を育てる保育へ-これからの保育を考える」	世界文化社
67	1991	論説	16	幼稚園と小学校との一貫性	幼児の教育 1101
68	1991	論文	16	「遊びの学習化をめざす指導-幼稚園から小学校へ」	東京書籍
69	1991	論説	16	幼稚園と小学校との一貫性	幼児の教育 1101
70	1992	随筆	1	日本保育学会	教育学研究 59(2)
71	1992	論文	3	シンポジウム 保育・幼児教育を問い直す	日本教育学会大会研究発表要項 51(0)
72	1992	論文	7	3才児教育の方向と課題	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 20
73	1992	論説	12	保育にバランス感覚を	幼児の教育 7

の研究をどのような時代に行っていたかを知るために、秋山の著作物の内容を分類することにする。分類区分は、日本保育学会研究発表区分¹³に従うこととする。

<日本保育学会研究発表区分>

01 保育思想・保育理論・保育史など

02 保育制度・保育行財政など

74	1993	教科書	5	「保育内容総論」はじめに、第1章保育内容の役割、第8章1遊びの教育的役割	北大路書房
75	1993	論説	5	シンポジウム「保育・幼児教育を問い直す-新しい発達観の探求-」 演者原稿「学習の可能性と教育の妥当性をめぐって」	教育学研究 60(1)
76	1993	論文	7	3才児教育の課題	岡山大学教育学部附属幼稚園研究報告 21
77	1993	論説	7	こどもの理解・受容・指導	幼児の教育 8
78	1993	論説	16	生活科教育の基本問題-「具体的な活動の体験を通して」を手がかりとして	学校教育 10
79	1994	教科書	1	「改稿保育原理」	医歯薬出版
80	1994	教科書	1	「教育・保育双書(1)教育原理」4章学校教育の内容	北大路書房
81	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(1)	保育界 5
82	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(2)	保育界 6
83	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(3)	保育界 7
84	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(4)	保育界 8
85	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(5)	保育界 9
86	1994	論説	2	子どものための保育所の充実(6)	保育界 10
87	1994	論説	5	子どもに生活の満足を	幼児の教育
88	1994	論文	16	幼小の関連をめぐって	日本保育学会大会研究論文集
89	1995	論説	1	対談 今、人間を育てる	幼児の教育 1101
90	1995	論説	1	今、人間を育てる	日本保育学会大会研究論文集 48
91	1995	教科書	13	「新現代幼児教育シリーズ 教育・保育実習」	北大路書房
92	1995	随筆	18	岡山での坂元先生(坂元彦太郎先生 追悼)	幼児の教育
93	1996	論説	12	「幼児教育を考える 22章:現代的課題を原点から問う」	北大路書房
94	1996	教科書	13	「保育双書(22)教育実習」第1章教育実習の意義	北大路書房
95	1997	論文	1	大正・昭和初期における「若竹の園」の研究	日本保育学会大会研究論文集 50
96	1997	論説	1	21世紀にむけて幼児教育を考える(10)	幼児の教育 101
97	1997	論文	6	幼児期の言語生活を求めて	日本保育学会大会研究論文集 50
98	1997	論説	13	シンポジウム<テーマ>「保育者養成課程の現状と課題」-- ベスタロッター・フレールはどのように教えられているか 〔含 質疑応答〕	人間教育の探究(10), 117-133, 1997
99	1997	教科書	15	「教育・保育双書 社会福祉」	北大路書房
100	1998	論文	1	大正・昭和初期における「若竹の園」の研究(2)	日本保育学会大会研究論文集 51
101	1998	論説	1	教育の原型としての幼児教育	幼児の教育 701
102	1998	論説	2	連続特集 教課書「中間まとめ」の徹底分析と具体化への課題(3)	教職研修 26(7), 39-103, 1998-03
103	1998	論説	5	この国の新しい幼稚園・保育園の教育・保育内容を創造する --いままでの幼稚園教育要領・保育所保育指針はよかったのか	エデュ・ケア 21 4(5), 14-34, 1998-05 栄光教育文化研究所
104	1999	随筆	1	「岡山県の保育所 50年」刊行によせて	西日本法規
105	1999	論説	7	自由保育は学級崩壊の元凶か	幼児の教育 1101
106	1999	論説	16	ラウンドテーブル「幼小の連携はどこまで可能か」	日本保育学会大会研究論文集 52
107	2001	教科書	13	「教育実習」	日本図書センター

- 03 発達論・心身の発達など
- 04 教育計画・保育計画・指導計画・評価など
- 05 保育内容Ⅰ（保育内容総論・遊び）など
- 06 保育内容Ⅱ（健康・人間関係・環境・言葉・表現）など
- 07 保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）など
- 08 保育環境・保育教材
- 09 乳児保育（0, 1, 2歳児の保育）など
- 10 障害児保育・障害のある子どもを含む保育など
- 11 児童文化・児童文化財など
- 12 保育者の資質能力・保育者の専門性など
- 13 保育専門職の養成など
- 14 家庭保育・家庭及び地域の連携・子育て支援など
- 15 児童福祉・児童の人権など
- 16 幼保一体化・保幼小連携など
- 17 多文化教育・異文化理解・ジェンダーなど

4. 結果

1) 時系列での表記

全ての分類（時系列、ジャンル、内容）の結果を時系列で表記した。それが表①である。

2) ジャンルごとの分類、年代ごとの分類、

ジャンル別での分類を年代別に分類した結果を表②に示す。

3) 内容区分ごとの分類

内容区分での分類を年代別に分類した結果を表③に示す。

表② 年代、ジャンル別の分類結果

ジャンル	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	計
教科書	0	0	3	3	8	14
随筆	0	0	1	1	3	5
論説	0	0	8	15	26	49
論文	2	6	10	9	12	39
合計	2	6	22	28	49	107

5. 考察

時系列での表記（表①）、年代ごとの分類（表②）、ジャンルによる分類（表③）、内容による分類（表④）、ジャンルの年代別（表⑤）、内容の年代別（表⑥）、内容のジャンル別（表⑦）から、秋山の研究傾向や著作傾向を理解し、かれの時代ごとに变化する幼児教育に関する興味・関心の傾向を分析すると以下のようにになると考える。

1) 1970年以前

1950年代は論文を2点である。まず、1954年発表の「学習と思考」である。思考を指導することに着目し、そのための教材や形態を考えるためのポイントについて述べている。次に、1959年発表の「人間的教養と普通教育の伝統」では、人間を育てるにあたっての教養と普通教育の関係性について史的観点から分析している。大学卒業後、附属小学校の教員として公務を果たしながらの論文発表であった。実践を行う場合に必要となるのは理論の構築であるという秋山の教育観が見て取れる。

1960年代の著作物は2点である。1960年発表の「明治初期における岡山県の初等教育--児童就学と教師の問題を中心として」と1968年発表の「わが国における幼児教育方法論の展開-1-幼稚園概念と恩物主義との結合を中心にして」である。

前者は初等教育における児童就学率が教師の待遇問題に関連させて述べられている。後者は幼児教育方法論を恩物主義が幼稚園教育概論に与えた影響について述べている。大学の教員となり、幼稚園教員養成課程に配属となったことから、幼稚園教育の理論に近づくため恩物を研究の視点に定めたのであろう。

1960年後半から1970年にかけては、学制制定から百年が経過することを受けて、通史・百年史が多数刊行さ

表③ 内容別、時代別の分類結果

内容区分	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	計
01 保育思想・保育理論・保育史など	2	5	10	4	13	34
02 保育制度・保育行政など	0	0	1	1	7	9
03 発達論・心身の発達など	0	0	1	0	1	2
04 教育計画・保育計画・指導計画・評価など	0	0	3	1	0	4
05 保育内容Ⅰ（保育内容総論・遊び）など	0	0	1	1	4	6
06 保育内容Ⅱ（健康・人間関係・環境・言葉・表現）など	0	0	0	3	2	5
07 保育方法（保育方法論・保育形態・幼児理解）など	0	1	3	4	5	13
08 保育環境・保育教材	0	0	0	0	0	0
09 乳児保育（0, 1, 2歳児の保育）など	0	0	0	0	0	0
10 障害児保育・障害のある子どもを含む保育など	0	0	0	0	0	0
11 児童文化・児童文化財など	0	0	0	1	0	1
12 保育者の資質能力・保育者の専門性など	0	0	0	2	5	7
13 保育専門職の養成など	0	0	1	3	4	8
14 家庭保育・家庭及び地域の連携・子育て支援など	0	0	1	2	0	3
15 児童福祉・児童の人権など	0	0	0	0	1	1
16 幼保一体化・保幼小連携など	0	0	0	6	6	12
17 多文化教育・異文化理解・ジェンダーなど	0	0	0	0	0	0
18 その他	0	0	1	0	1	2
合計	2	6	22	28	49	107

れた。秋山はこの作業に積極的に関わっている。1964年『岡山県保育史』、1968年『保育史 岡山市史』、1968年『日本新教育百年史』がそうである。岡山県、岡山市のみならず、玉川大学出版の全国的な教育史にも関わっているのが興味深い。

1970年以前の秋山の著作物で確認できたものは以上8点である。この8点を俯瞰すると、1960年半ばから研究対象が変化することに気づく。前半は教育哲学、特に初等教育を視野に入れていた。しかし、後半から幼稚園や保育に視点に移り、また、通年史編纂のブームもあったのであろうが、史的分野に興味移っていったことが読み取れる。

2) 1970年から1980年まで

1970年代の著作物は26点である。代表する著作物は、1979年発行の『岡山文庫④岡山の教育』であろう。岡山県の教育に関する歴史を江戸時代の藩校の状況から、明治大正昭和と時代ごとに各地域の学校の資料を提示して丹念に述べたものである。学校教育を全般に扱っているので、幼児教育・保育に関係する箇所は少ないが、社会の状況によって変化する教育制度を庶民の立場から丹念に記述してある力作である。

この頃、秋山は頻りに保育現場に通っていた。その時の様子を「子どもの目の輝くとき」の「あとがき」に以下のように述べている。「昭和52年4月から、岡山大学教育学部附属幼稚園園長となり、幼稚園における子どもの生活を誰に気がねすることなく、十分観察したり、それに参加する機会が与えられました。また、多くの幼稚園や保育所の実践に接する機会や保育者の方々と、保育実践についての意見を交換する機会も増えてまいりました。」¹⁴このように、保育現場に足しげく通い、子どもと直に接し、保育者から生の声を聴いていた時期である。したがって、史的研究もあるが、保育形態や保育指導法に関する著述が多い。

また、養成校の教科書に編著で関わった書籍が増えてきた時期でもある。『幼児教育論』では、人間は遺伝よりも環境によって形成されていくことを前提とした上で、「学習の可能性」¹⁵は無限であること、しかし、「教育の妥当性」¹⁶の視点で幼児期の教育を考えると、「幼児の思考は、彼らの直接経験に裏付けられてはじめて深められていく」¹⁷のであるから、早期の文字教育に警鐘を鳴らしている。そして、それを「発達のアンバランス」¹⁸という言葉で表している。晩年の著作物に見える「学習の可能性と教育の妥当性」¹⁹にこの頃より着目していた

と考えられる。

1970年代の最後の著作物は井上久雄編の書籍『講座 現代教育学 日本の教育思想』である。秋山は「益軒」を担当している。秋山の幼児教育論に影響を与えたであろう視点として、次の論に注目したい。それは、益軒の学問について述べた個所である。「知識は実践を導くためのものであり、逆に知識は実践によって確固たるものになる」²⁰として「学問の実践性、実用性を強調する」²¹ので、教育論は具体的な方法論をもって述べられている。また、益軒は幼児期の教育を「特に考慮すべき時期」²²で幼児期の教育上の配慮についての具体的記述を紹介している。益軒は「食事や起居など日常のあたりまえの行為のなかで、人倫のみちを自然に体得させなければならぬとするのである。『平常と学習』『ならふと教える』ということが、幼児に区別されて意識されることは望ましいことではない。」²³この点、まさに幼児教育方法の本質をついたものである。その外にも「幼児の自然性を十分認め」²⁴ること「随年教法」²⁵といった発達段階に即した具体的な教育方法も紹介している。益軒を具体的・体系的な教育論を展開した人物として評価している。この論は、この後の秋山の教育観の基礎に相似していると考ええる。

3) 1980年から1990年まで

1980年代の著作物は28点である。6領域から5領域のように大幅に変わった幼稚園教育要領の改訂が、この時代の最後の出来事であるので、この10年間は小林が述べているように、早期詰込み教育からの脱却するために新しい教育方法を模索していた時代といえる。小林は、この時代を次のように説明している。

「行き過ぎた早期教育、つめこみ主義保育が全国の幼稚園で行われたことにより、幼児がノイローゼになったり、不登校になるなど多くの弊害を生んだ。このことを反省し、幼児につめこみ教育をやめ、もっとのびのびと生活させ、遊ばせることを目指す保育教育、保育者の先導や介入を極力抑え、幼児が自発的にやりたい遊びをすることで、生命力あふれる『子どもらしさ』が生まれ育つという『児童中心主義』の考えのもと、平成元年(1989年)に『幼稚園教育要領』は大改訂され、旧『幼稚園教育要領』の6領域も、『音楽リズム』と『絵画制作』とを一つにした『表現』という新領域になり、『健康』・『人間関係』・『環境』・『言葉』・『表現』の5領域となった。」²⁶

この時代では、今まで主流であった「保育思想・保育理論・保育史」の著作数は減り、保育内容・保育方法といった保育実践に関わる著作物が増えてくる。その代表作は、1984年に森上史郎とともに編著として刊行した書籍『指導法の研究 保育方法と形態』である。秋山は「第1章 保育形態とは何か」を担当している。この内容は次のようになっている。

まず、保育形態の分類の観点から3種類あげること、保育形態の意義を明確にしている。そして、そのうえで、それぞれの形態の長所短所について説明し、最後に「自由保育」²⁷は形態論ではなく「一種の保育哲学、あるいは自由に子どもを保育しようという保育理念に支えられた保育の主張、あるいは保育運動だ」²⁸といい、自由保育は形態論として考えると非常に難しいため「あいまいに使われている」²⁹と指摘している。このように保育実践を具体的に説明することで、単なる養成校の教科書ではなく、保育実践者への保育改善を提言した著作物となっている。

また、1985年に雑誌『幼児教育研究』に載せた「幼稚園と小学校との関連についての考察—『婦人と子ども』『幼児の教育』の論説を中心に—」は2013年発行の書籍論集『現代日本の教育史3 幼児教育・障害児教育』に取り上げられるほどの力作である。

湯川嘉津美はこの論文を以下のように評している。「幼稚園と小学校の関連について考察した初期の論考で、『婦人と子ども』『幼児の教育』誌に掲載された主張や研究を中心に、幼小の関連や連携のあり方について歴史的な検討を行っている。幼小の連携については、幼稚園の普及を背景に、1910（明治43）年ころから課題となっており、1915（大正4）年の全国幼稚園関係者大会では文部省諮問案の一つに『幼稚園から小学校への連絡』の問題があげられていた。『婦人と子ども』『幼児の教育』誌では幼少の連携問題を大きく扱い、連携の方法についても調査研究に基づいて具体的な対案を行っており、その歴史的検討は今日の幼小の連携のあり方と方向性を考える上で重要な示唆を与えてくれる。」³⁰

4) 1990年から没するまで

1990年代の著作物は48点である。1970年代、1980年代と徐々に増加しているが、ここで急増しているといえる。1989年の幼稚園教育要領の改訂により、幼児教育・保育現場が保育方法について混乱していた時代である。「幼稚園教育は、幼児期の特性を踏まえ

環境を通して行うものであることを基本とする。」³¹を重視するあまり、「幼児の自主性を重んじ主体的な遊びをしてもらうために、遊びたい時に遊びたい場所で遊びたい物（事）を一日中自由にさせておき、教師や保育士は一切指示せず見守るだけの『自由保育』が主流となった。たとえ幼児同士で喧嘩がおきても介入せず、幼児同士で解決するのを見守るのが良いとされ、極端な場合は幼児が喧嘩でケガをしても介入しない園まであった。平成元年の教育要領が実施された当初に各地で開催された研修会や研究会では、『自由』と『放任』とはどう違うのか、どこまでが『自由』な保育でどこからが『放任』なのかということがさかんに議論された。」³²と前述の小林は述べている。このような時代の要請を受けて秋山の著作物は急増したと考えられる。

また、この時代に増えたのは保育思想・保育理論・保育制度である。これらを教科書でなく、論説や論文として学会論文集や教育・保育雑誌で発表している。「自由保育」の具体的方法が分からず、混乱した保育現場に対して、秋山は基本となる保育思想・保育理論を様々なメディアで語ることで、現場の保育者が「自由保育」の本質を理解して保育ができるように配慮したと考える。

さらに、小学校との接続についての議論がかなり表面化したのも、この時代である。幼小連携は、幼稚園教育要領刊行時からの課題であったが、新教育要領に「幼稚園教育は『環境を通して行うこと』を明示した」³³ことに伴って、教科主義の小学校との接続が問題となって浮かび上がったと考える。秋山は持論であった「学習の生活化、生活の教育化」³⁴の理論を整理し、1980年代に6点1990年代に6点の論文論説を著している。特に1990年代には、『遊びの学習化をめざす指導—幼稚園から小学校へ』を発行した。これは秋山の幼小連携理論の集大成といってよいものである。このような研究が高い評価を受けた結果として、小学校との接続を題材としたシンポジウム等での活動が増え、関連の著述が増えている。

また、保育所問題に関する論説を保育雑誌に連載している。保育所増加を受け、幼児教育が幼稚園だけの問題ではなく、保育所保育にも同様の提言をする時代のニーズに応えたものであろう。

6. おわりに

秋山が研究生生活を始めた1950年代から没する2000年までの著述物すべてを探し、時系列、ジャンル別等で分析を試みた。この結果、改めて、秋山の幼児教育・保

育に関する熱い思いを感じると同時に、没する直前にも精神的に執筆や講演に取り組む姿を知ることができた。秋山が没したのは、岡山大学教育学部を退任し私学での養成教育に携わろうとする途上でのことである。長年、秋山と研究に携わってきた森元が述べるように「幼児教育の行き先・方向を決めるこの大事なときに舵取りを失ったことになった。」³⁵といっても過言ではないと思う。

しかし、秋山がいない今、幼児教育・保育に蓄積する多くの課題に対して、解決の糸口を見出す努力をすることが、これからの幼児教育・保育の発展につながると考える。前述の湯川は日本における幼児教育史研究について、「一般的に研究の蓄積はいまだ不十分であり、究明すべき問題も多く残されている。」³⁶と述べ、今後の研究課題を3点指摘している。

1点目は「大正・昭和期の幼児教育史研究の進展」³⁷である。2点目が「戦後幼児教育史研究の必要性」³⁸である。「すでに戦後70年近くが経過しているにもかかわらず、教育史の立場から実証的に検討した戦後幼児教育史研究は少ない。これまでも岡田正章ほか編『戦後保育史』(1980)などが刊行されているが、戦後改革を担った当事者の証言をもとに資料を整理する形でまとめられたものがほとんどであり、戦後の歩みを史資料に基づきながら実証的に検証する作業は遅れている。戦後日本の幼児教育の展開過程を制度、行財政、理論、カリキュラム・方法、保育者養成、保育実践、親の幼児教育意識といった側面から実証的に明らかにする研究が必要とされており、それは今日の幼児教育問題を考える上でも重要である。」³⁹3点目は「最新の研究成果を反映させた信頼できる通史の刊行」⁴⁰である。

湯川が論ずるように、倉橋惣三や津守真の保育思想や戦前の保育実践に関する研究は多い。しかし、戦後となって70年以上が経過し、昭和・平成・令和と時代が変化している。戦後、特に昭和後半の幼児教育史、保育史に関する研究は少ない。したがって、今後は秋山の業績研究をつづけながら、秋山が生きた戦後の幼児教育史に関して、史的資料を基に検証する作業を続けたい。

<引用文献>

- 1 日本保育学会.(2016). 保育学講座1 保育学とは 一問いと成り立ち. 東京大学出版会. p i
- 2 同上. p i
- 3 拙稿「秋山和夫における幼児教育論 (1) —生活科の幼小関連における重要性について—」中国学園紀要第18号(2019)を参照
- 4 秋山和夫.(1995). 岡山での坂元先生. 幼児の教育, p19
- 5 日本保育学会(2016) 保育学講座1 保育学とは一問いと成り立ち 東京大学出版会. p141
- 6 同上. p141
- 7 小林浩子.(2018). 幼稚園・保育所の戦後から平成までの制度と保育教育の変遷. 羽陽学園短期大学紀要第10巻第4号(通巻38号). p434
- 8 世界大百科事典(1998). 平凡社
- 9 東郷雄二(2000). 文科系必修研究生活術 夏目書房. p156
- 10 大辞林第三版(2015) 三省堂
- 11 日本大百科全書(1994) 小学館
- 12 同上
- 13 研究の発表区分.(2020). 一般社団法人日本保育学会第74回大会 第1号通信
- 14 秋山和夫.(1980). 子どもの目が輝くとき. チャイルド本社. p207
- 15 秋山和夫・小田豊・牧健次.(1979). 幼児教育論. ミネルヴァ書房. p12
- 16 同上. p14
- 17 同上. p15
- 18 同上. p18
- 19 秋山和夫(1974). 現代社会における幼稚園の役割. 教育新時代(1) 世界教育日本協会. p2
- 20 井上久雄編(1979). 講座現代教育学2日本の教育思想. 福村出版. p178
- 21 同上. p178
- 22 同上. p179
- 23 同上. p179
- 24 同上. p180
- 25 同上. p185
- 26 小林浩子.(2018). 幼稚園・保育所の戦後から平成までの制度と保育教育の変遷. 羽陽学園短期大学紀要第10巻第4号(通巻38号). p434
- 27 秋山和夫編著(1984). 指導法の研究 保育方法と保育形態 医歯薬出版. p1
- 28 同上. p17
- 29 同上. p18
- 30 湯川嘉津美・荒川智編.(2013). 論集 現代日本の教育史3幼児教育・障害児教育. 日本図書セン

- ター .p297
- 31 文部省. (1989) .幼稚園教育要領.p1
 - 32 小林浩子. (2018) . 幼稚園・保育所の戦後から平成までの制度と保育教育の変遷. 羽陽学園短期大学紀要第10巻第4号 (通巻38号) .p435
 - 33 汐見稔幸・松本園子・高田文子・谷治夕起・森川敬子. (2017) .日本の保育の歴史 子ども観と保育の歴史150年. 萌文書林.p334
 - 34 秋山和夫 (1985) .低学年教育の改造. 教職研修. (5) 教育開発研究所.p74
 - 35 森元真紀子・三村玲子・西崎照美・前嶋裕子. (2020) . この道を選んで40年—多くの人に支えられて— . 三門印刷 .69
 - 36 湯川嘉津美・荒川智編. (2013) . 論集 現代日本の教育史3幼児教育・障害児教育. 日本図書センター.p299
 - 37 同上.p299
 - 38 同上.p299
 - 39 同上.p299
 - 40 同上.p299

A Study on Akiyama Kazuo's Thought of Early Childhood Education 2

Junko ONO

Department of Childhood Education,
Faculty of Welfare and Health Science,
Fukuyama Heisei University

E-mail : onojun@heisei-u.ac.jp

Abstract

This paper is the second report of Akiyama's research. In the first report, we focused on "collaboration with young children" and "connection with elementary schools". However, this time, we decided to grasp the outline of Akiyama's research by bird's-eye view of Akiyama's entire work, rather than narrowing down the viewpoint of research to one. Therefore, it is thought that it is possible to clarify concrete measures to solve the problem of the current daycare site where the form of the child care facility is diversified.

As a method of research, Akiyama found a work that he wrote while surviving, and first decided to write it down according to the time series. As I wrote in my career, Akiyama published his thesis as a researcher, and as a kindergarten manager, he also advised on the garden's research and published the paper in his research report. In addition, he is a person who has carried out various activities to contribute to the improvement of child care and education, such as editing the history of the prefectural history city, posting to magazines related to childcare and education, supervising, editing, and writing textbooks for the training of nursery teachers and educators, and the manuscripts that host symposiums.

Although there are many works and the whole picture has not yet been grasped, we will classify the works that are known at this time in chronological order. It was thought that this work clarified the relation between the change of the interest and the interest of Akiyama and the request of the age surrounding the child care and the education. Next, these works were classified into ages, genres, and contents, and then classified by genre by genre, by age of content, and by genre of content. As a result, the development process of early childhood education in Japan after the war from Showa to Heisei, the era when Akiyama was alive, became clear. In the future, we believe that by empirically studying Akiyama's research based on historical materials, we will be able to empirically clarify the post-war history of early childhood education and child care from the aspects of systems, finance, theory, curriculum and methods, child care training, child care practice, and parents' awareness of early childhood education.

KEYWORDS : History of early childhood education, Kazuo Akiyama, Theory of childcare